

思考を活性化させるための 教師の役割とは何か

拓殖大国際学部准教授 石川一喜^{かずよし}

アクティブ・ラーニング（以下、AL）の推進は、授業における教師の役割にも変化をもたらすことになる。新たな教師の役割、すなわち、生徒と共に、生徒の中から答えを探すファシリテーターとしての役割について、教育方法論が専門である石川一喜准教授に聞いた。

ALの本質は 活動ではなく思考

これからの世の中は、「答えが1つではない時代」「正解が分からない問題が山積している社会」と言われています。だからこそ今、学校教育においても、答えが1つではない問題や解決が難しい問題に、仲間と協働しながら粘り強く取り組む人材の育成が大きなテーマになっています。今、高校現場に急速に広がりがつつあるアクティブ・ラーニング（以下、AL）も、そのような社会のニーズとは無縁ではありません。

ALを実践する上で私が重要だと考えているのは、「ファシリテーター」としての教師の役割です。ファシリテーターとは、集団の中の知的な創造活動を促進する人のことです。司会・進行役のような役割もありますが、重要なのは、集団を構成するメンバーの力を最大限に引き出す役割を担う点です。高校教育の現場で言えば、授業において、生徒一人ひとりが参加しやすい場づくりをし、学習意欲や興味・関心を引き出して、思考を深める役割です。

日々の授業において、教師がファシリテーターとして振る舞うことで、ALも単なる参加型学習とは一線を画したものになります。生徒が話し合っている場面を見ると、それだけでALのように思えますが、注目すべきはその時の生徒の思考がアクティブになっていくかどうかです。いくら生徒が話し合いを続けたとしても、授業中の生徒の気付きや意見を引き出すことなく、教師がまとめて終わりにする授業は、ALとは言えません。大切なのは、生徒が他者の考えを聴き、自分で考え、そして一人ひとりの知恵や経験を組み合わせる創造的な成果を「創発」することであり、決して活動ありきではないのです。

もちろん、生徒の授業への参加感
は重要ですが、ALを進める上では、「見せかけの参加感」に気を付けるべきです。つまり、活動してはいるけれど、授業の後に、「今日の授業で得た気付きは何？」と問われても答えられない状態です。教師が指示する通りに動いただけで、頭の中がアクティブになっていない。そういった状況は避けなければいけません。

分かった感と モヤモヤ感を両立する

これまでの授業は、教師があらかじめ知っている答えを分かりやすく教えるものでした。しかし、これからの授業では、生徒が安心して思考



いしかわ・かずよし◎東和大国際教育研究所研究員を経て、2004年より拓殖大国際開発教育センターに赴任。専門は、教育方法論（ファシリテーション）、ESD（持続可能な開発のための教育）など。『教育ファシリテーターになろう！～グローバルな学びをめざす参加型授業』（弘文堂）の編者の1人。

を深められる環境をつくった上で、問いを投げ掛け、生徒の中から答えを引き出し、その教室の中でより良い答えを創り出していくことが求められます。つまり、先生方の中で、授業観のパラダイムシフトが必要なのだと私は考えます。

もちろん、高校では、既に答えが分かっていること、すなわち、多くの知識や技能を学ぶことも求められます。そのため、授業も、知識や技能の習得の場面においては、従来型のティーチングやレクチャーも引き

続き必要でしょう。しかし、予定通りの答えにたどり着くだけで終わるのではなく、思考を深める問いを効果的に投げ掛け、創発的に思考する活動を取り入れることで、一歩進んだ、深い学びを実現することが出来るのではないのでしょうか。

授業が終わった時、生徒が「よく分かった!」と感じる授業は素晴らしい授業です。しかし、教師の言葉によって、「何だかモヤモヤした気分」といった状態にさせ、頭の中で熟考を継続させるような授業も、こ

れからの時代では「良い授業」なのだと思えます。「分かること」と「モヤモヤすること」の両方を大切にしてい、授業の成果を多面的に評価する尺度の開発も今後の課題でしょう。

学びを個別化する ファシリテーターに

私は、教室は安心・安全な場であればならないと思っています。何を言ってもよい場の雰囲気があってこそ、考える楽しさを満喫できるからです。ALでは、場をどうつくるかが非常に重要であり、机の並び方1つで発言する意欲が変わることも珍しくありません。その意味でも、教師には、それぞれの教室で、生徒一人ひとりにとって最適な学習環境をつくり出し、学びを深める問いを投げ掛けるファシリテーターとしての役割が重要になります。また、ALで育まれる「勉強は楽しい」「みんなと学び続けたい」という思いは、生徒と教師や、生徒同士の信頼関係を醸成していくだけでなく、生徒の学習観を肯定的なものとし、生涯を

通じた学びの土台となります。

将来、学校のICT環境が拡充すれば、反転授業の導入など、生徒の学び方も大きく変わっていくかもしれません。しかし、それでも変わらないのは、教室における教師の存在の重要性だと私は思います。なぜなら、生徒の状況を最もよく知る教師こそ、思考を更にダイナミックに展開させる問いを投げ掛け、その問いについて仲間と活発に話し合える場をつくる事が出来るからです。その結果、生徒の学びは個別化し、より一層深まっていくことでしょう。

目の前の生徒の状態を観察しながら、学びを深めるファシリテーターとしての専門性を先生方が発揮していくことで、教室での学びは、更に豊かになるのではないのでしょうか。

次ページから、石川准教授と高校教師が、「教科指導におけるファシリテーター」としての教師の役割について、それぞれのALの実践を交えながら語り合います。

